



Title	新懷徳堂建設まで
Author(s)	今井, 貫一
Citation	懷徳. 1931, 9, p. 101-108
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88838
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

改めて、己巳殘愁錄と題して、家兄が筆を繼ぐ相ですから、私の拙文は此に筆を止めて置きます。(昭和六年八月盛夏)

新懷德堂の建設まで

今 井 貫 一(談)

新懷德堂建設は、明治四十四年十月上旬に、懷德堂記念會の名を以て舉行されたる懷德堂先賢の祭典に起因したものである。その時の經費に六千圓餘りの剩餘が出来たのも、新懷德堂を起さうといふ重要な一つの原因になつたのは勿論であるが、先賢の祭りをした當時、有志の間には懷德堂復興の希望が可なり強く主張されて居つて、それが新懷德堂建設の最も重要な厚因になつて居ると思ふ。

明治四十四年の祭典後直ちに懷德堂復興の議が唱へられ、西村碩園先生を中心にして寄々話があつた。急先鋒は無論碩園先生であつた、先生は直に復興計畫に着手され、復興の方法並に復興する懷德堂記念會の役員になつて貰ふ人々なども、私かに物色して居つたのである。永田磐舟翁などは理事長

として、西村氏から早く白羽の矢を立てられた人である。自分を中心として申せば、私は懷德堂復興が計畫されたる四十四年の秋、急に外遊することになった。ところが碩園先生は、私が不在の間は計畫を進め難いといふ考へで、四十五年の三月から大正二年三月まで私の外遊中、全くその事業を計畫のまゝにして進行されずにあつて、私が歸つてから、直ぐに實行に着手されたのである。最も私の不在中にもぼつ／＼用意はされて居つた。それは新たに興す懷德堂記念會は、財團法人組織にしやうといふこと、並にその寄附行爲を如何様にするかといふやうな相談が行はれて、先賢祭典の時の記念會の役員であつた植村俊平氏などが、寄附行爲の草案者になつて居つたやうに聞いて居る。私が歸つて間もなく草案の寄附行爲を本にして、有志が集つて、愈設立の相談會が開かれた。その相談會で寄附行爲も決定せられ、新しき懷德堂記念會の維持會員、評議員、理事など、御依頼する方々の豫選なども内々相談をした。その相談に基いて愈財團法人懷德堂記念會設立の實行に取かゝつた。即ち賛成出資者を維持會員とし、設立認可願などもその代表者の名を以て提出したのである。此設立願は直に認可せられ、それから永田翁が理事長に選舉せられるまで萬事順調に速かに運んだのであつた。

永田氏を理事長に推薦した最初の首唱者は、碩園先生である。私が外遊に出發する數日前、丁度四十五年の三月十日の陸軍記念日に、招かれて城東練兵場の陸軍記念式に參つた時に、私は碩園先生の紹介で初めて永田氏に面會した。碩園先生と私との間には、新たに生れる懷德堂記念會に就て、是非

永田氏に理事長に就任して貰いたいといふことの打合せが、前にあつたけれども、その時にはさういふ話には觸れず、たゞ御交誼を願ふといふ位しか話はしなかつた。

愈財團法人設置認可にもなり、維持會員も出來、維持會員中から評議員の選舉も出來、又評議員によつて五人の理事も選ばれ、永田氏が理事長に互選せられた。理事の中には碩園先生も私も、從來の關係から加はり、愈機關が出來上つたのは、大正二年の九月であつた。

で會は設立したが、事業を行ふ講堂も、事務所もない。そこで寄附金の集るに従つて起つた問題は、講堂の建築である。碩園先生は非常に性急な人であるから、寄附金の未だ十分に集つて居らない時から、既に講堂建築の計畫にかゝつて、建築技師に依頼して、設計圖なども書いて貰ひ、建設の場所なども、當時の大阪府知事大久保利武氏に交渉して、何處か府有地の適當な所を無償で借受けて、其處に建てやうといふやうな案を立て、これを議題として最初の評議員會を大阪ホテルで開いた。その時には既に懷德堂復興の事業が天聽に達して、畏くも御下賜金の御沙汰もあつたので、旁々事容易ならざるものであるといふことに、有志の間に考へられ、有力な方々が多數集つて、懷德堂講堂建設事業遂行に就て、論議された。その時の出席者中には中橋徳五郎、鈴木馬左也、高谷恒太郎、芝川又右衛門、大久保利武といふ人々も居られ、兎に角事業遂行には餘程慎重の考慮を要する、先づ懷德堂の教學の首腦に仰ぐ教授その人はどうするか、又懷德堂復興するにしても、昔の懷德堂と今日の懷德堂とは、

時勢が異なるから、全然石庵、或は竹山の時代のやうに考へるわけにはいかない、種々の新しい思想、或は教育の新傾向といふやうなものもあるのであるから、同じく市民教育といつても、昔の大阪市民と今の大阪市民とは事情を異にするものであるから、新懷德堂では今の市民の實際に適應し、而も昔の懷德堂の精神を失はないやうに考慮していかなければいけない、講堂を建築することは容易であつて問題ではないが、講堂内で行ふ事業に就ては、大に考究を要する、斯ういふやうな議論が盛んに行はれたのであるが、結局歸着する所を得なかつたのである。そのために懷德堂建築といふことも、その評議員會では折角西村氏の斡旋にて設計圖も出來て居つたけれども、それらのものは寧ろ末であるといふやうなわけで、建築のことは決定に至らなかつた。併し碩園先生を初め、永田理事長や私なども早く講堂を建築し、適當な教授を招聘して事業を始めたい、單に理想的に深く考究して居つては容易に實行が出來難い、既に寄附行爲に財團法人の目的に示してある通りに事業を行ふには、どうしても講堂を早く建て、教授を早く招かねばいかにいふことから、それには費用を要するからといふので永田理事長及び碩園先生が先に立つて、大阪を初め、東京方面にも出掛けて、有志の寄附金を懇請した。そのうち寄附金も段々集つて、前の懷德堂記念會から引繼いだ六千圓を合せて、かれこれ四五萬圓の資金が出來たのである。その最初の四五萬圓の寄附金を集めるに就ては、何等事業をして居らないで、たゞ懷德堂記念會設置の趣旨を印刷物、又は口頭で述べて有志に依頼したのであるから、

寄附者の諒解を得るのが困難であつた。それに就ては兩君の努力といふものは、一方ならぬものであつたと思ふ。そこで兎に角四五萬圓の金が出来たから、愈講堂を建てやうといふので、敷地を今の豊後町の商品陳列所（今貿易館）内に、數百坪の大阪府有地を、知事並に内務部長の厚意によつて、無償で借受け、寄附金の中から約貳萬圓ばかりを割いて、講堂並に事務所を建てることにきめた。かやうにして大正五年九月に出来上つたのが現在の講堂と事務所である。

講堂が出来るまで、毎年秋十月に舊懷德堂の先生の祭典を行ひ、同時に記念講演會を行ふといふ事業は、繼續してやつて來たが、それは或る時には中之島の圖書館内、或る時には天王寺の公會堂などを借りて行つて來たのである。今の講堂が出来てからは、無論講堂内で行つて居るわけである。

講堂の建築は大正四年の秋からかゝつたのであるが、建築が半ばにも進んだと思ふ頃、永田理事長、碩園先生、私と三人、建築現場の監督小屋に集つて、建築狀況を見、工事に關する相談をしたが、主たる要件は、この講堂が斯くの如く段々出来上つて行くに就て、取急いできめなければならぬ重大なる問題は教授の招聘である。其處で三人が招聘する教授に就て、色々と相談したが、その時はまだまらなかつた。兎に角京都の狩野直喜博士に相談しやうといふことになつて、私が京都へ行つて博士の御意見を伺つた。その時に前に建築小屋で三人が相談中に申出でた數人の先生方のことも無論参考に申して、狩野博士の意見を聴き、尙教授推薦方を依頼したのであつた。

松山直藏先生を招聘することになったのは、即ち此時に私と狩野博士とが協議中に初めて出た話であつた。狩野博士は熱心に松山先生を推薦されたので、私は大阪へ歸つて永田理事長、碩園先生に、その趣きを報告をし、尙協議をしたが、永田理事長は松山氏は全然知らない人であるが、碩園先生は同じ學問の道であるから多少は知つて居られたやうであり、私は松山氏とは同窓の間柄である。で狩野博士の推薦に基て私の知てゐる處を申述べたのであるが永田理事長、碩園先生は、松山氏招聘に就ては早速同意され、そこで招聘交渉の爲に私に廣島へ行つてくれといふことであつた。よつて私は八月の暑い時分であつたと思ふが、廣島へ行つて一日松山氏に仔細に話をして、就任の懇請をしたのである。その時に松山氏は直ぐに承諾されたわけでないが、其後色々考慮された結果、愈承諾をして赴任されたのは、その年の十二月であつた。その年の秋には講堂が出来て落成式もし、又先賢の祭典も行ひ、かやうにして大正五年の春から冬までの半年間に講堂も出来、教授を聘するまでに事が運んだのである。さうして大正六年正月から愈平時の懷德堂の事業を行ふこととなり、松山先生が教授として講座を擔任し、碩園先生も講師として毎週講義をされたのである。

開堂後今日まで十有五年、關係各位の御盡力によつて無事に事業を繼續して參つたか、初めの間のことを今から考へると随分無理なこともあつた。その一例を申すと、なるほど基金は四五萬圓集つたが、その中に二萬數千圓といふ金は建築費に使ひ、僅かの基金しか残つてゐない。その利子を以て教

授並に職員を招聘するといふことは、無謀でとても出来難い。さういふことの勘定に就ては碩園先生は一切無頓着であつて、兎に角やればよいといふやうな態度にしか見ねない。金があらうがなからうが、教授を招聘する、招聘すればどうにかなるといふやうな風であつた。碩園先生のその意氣込を損はず、それを實行せしむるやうに始末をして行つた人は即ち永田理事長である。教授招聘の時から數年間、基金が集るまでの間、教授の俸給といふものも、全然永田理事長が人に知らせずに出して居つたのである。永田理事長が斯やうな費用を出して居つたといふことは、碩園先生と私位が知つて居つただけで、長い間松山教授自身さへも知らなかつたことと思ふ。左様な無理があつて、なか／＼事業の維持は容易ぢやなかつたのである。それで一面碩園先生は、大阪府知事、大阪市長に願出で、府市兩方から各二千圓づゝの補助金を出して貰ふことになつたのである。さういふやうな府市の補助金、永田理事長の特別寄附といふもので、基金の少かつた時代を凌いで參つたのである。今日の如く基金が相當な額に達して事業を行ひ、經濟的の心配がなくなつて居ることから考へると、創立後四五年間といふものは、随分經濟的に苦心をしたものである。

最初の財政困難に善處されて行つたのは、先づ永田理事長であると思ふ。その後段々寄附金を募集するに就ては、現理事長の小倉正恆氏は容易ならぬ配慮をされ、殊に最近寄附金大募集をした時には小倉理事長は寧ろ永田翁よりも、一步進んで熱心に盡力せられたやうである。この小倉理事長、永田

翁兩君の働きで、現在の經濟的基礎の確立したわけである。懷德堂の成立に就ては、初めは永田翁の經濟的維持、碩園先生の事業計畫、この二つの力が與つて出来上つたので、その後經濟的維持を擴大したのは、今の小倉理事長が與つて力がある。

永田翁の歿後小倉氏が二代目の理事長になつて、今日の隆盛を見るにつけても、懷德堂が創立以來左様な有力な三氏、即ち西村、永田、小倉といふやうな人を得たことが、最も大きな原因である。尙創立以來多額の金を屢寄附された大阪その他の有志の力も、無論今日の懷德堂を見るに至つた重大な要素であるが、直接關係者としては、以上の三君の功績を擧げなければならぬと思ふ。(終)

